

研究スタッフ紹介



細澤 麻里子

国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター

私は今、皆さんが参加してくださっている東京ティーンコホートのデータを使って、子どものメンタルヘルスの研究、特に発達の凸凹を抱える方の二次的な精神的問題の予防に関する疫学研究をさせていただいています。

疫学研究を始める前は、小児科医として大学病院で10年弱ほど発達外来を担当していました。発達外来には、様々な発達やこころの悩みを抱えた子ども達が相談にきます。様々な相談を抱えて子ども達と向き合っていく中で、子どもを取り巻く成育環境に介入することで予防できた悩みや問題もあったのではないかと考えるようになり、疫学研究をはじめました。

私自身の思春期の思い出は、父の仕事の関係で米国に数年間滞在し、帰国して日本の学校に編入したあたりから始まります。楽しい思い出もたくさんありますが、一方で、日米どちらの学校文化にも馴染み切れない葛藤も抱えていました。当時、教科書で読んだ若山牧水の「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよぶ」に自分を重ねたのを覚えています。あれから〇十年、今も、気が付くと空と海の境目を漂っていることがよくあります。空と海の境目は、どちらの世界の楽しさも味わえる面白い場所と今は思っています。子ども達一人ひとりが、自分らしく、こころの側面からも健やかに育っていけるような社会環境のためにどうしたらよいのか、東京ティーンコホートの皆さんと一緒に研究を通じて考えていきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

★ご住所が変更になるご家庭、ご住所が変更されたご家庭へのお願いです。

もうすぐ引越し!
だいたい準備も終わったし、新しい生活が楽しみだわ!
ちょっと遠い場所だけど...

2 通りの方法がありますので、ご連絡ください

1 電話で連絡する
こんど引越しするのですが...

2 ハガキを郵送する
専用ハガキ
そういえば、ティーンコホートはどうすればいいの!?
そういえば、ニュースレターと一緒にハガキが入っていたわね...

ご協力いただける方へは
遠方のご自宅まで研究スタッフがお伺いします!
ひきつづきご協力をお願いします

TOKYO TEEN COHORT PROJECT

調査
お問い合わせ先

一般社団法人輿論科学協会「青春期の健康・発達コホート研究」事務局
〒151-8509 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-8-6
Tel 0120-551-327 (AM10:00~PM6:00) 担当: 島田・井田

研究実施
機関

東京大学
公益財団法人東京都医学総合研究所
国立大学法人総合研究大学院大学

東京ティーンコホートの詳しい情報はホームページでもご覧いただけます

<http://ttcp.umin.jp>

- ◆ 第1号～第16号ニュースレターを掲載しています。
- ◆ 現在の調査協力者数や東京ティーンコホートを紹介する動画も掲載しています。

デザインを
リニューアル
しました



思春期のお子さんとの健康と発達の過程をアンケート調査などにより、科学的に検討するプロジェクトです。

東京ティーンコホート ニュースレター
第17号(2021年7月発行)
発行:公益財団法人東京都医学総合研究所

- 巻頭
応援メッセージ: 田熊 美保
- 論文紹介
山崎 修道 / 中西 三春

- 細澤 麻里子
- 巻末
今後も引き続きご協力お願いします

TOKYO TEEN COHORT NEWS LETTER

東京ティーンコホート
ニュースレター

Vol.17

2021. JUL

昨年から大きく生活が変わり、マスクを着けることや手指を消毒することにすっかり慣れた一方、調査を通じて皆様とお会いできる機会のなかなか無いことに、とてもさみしく感じてしまいます。そんな状況でも他の人との距離を気にせず遊べるオンラインゲームについて、また日本とイギリスの若者たちにおける考え方のクセと健康の関係について、10歳・12歳・14歳頃にご協力いただいた調査からの研究成果をご報告します。「今後こういう調査もしてほしい…」「こんなテーマの結果も知りたい!」等ありましたら、調査員等を通じまして、お気軽にお知らせください。

ドキドキワクワク冒険しよう!

応援 メッセージ



サポーター
ファイル
16

OECD教育スキル局シニア政策アナリスト

田熊 美保

上智大学卒業。ポストン大学大学院修了。フランス国立東洋言語文化大学院修了。

国際連合教育科学文化機関(UNESCO)教育セクターを経て、経済協力開発機構(OECD)へ。OECD教育局教育研究革新センターにおける外務省派遣アソシエートエキスパートを経て現職。

現在、パリ在住。OECD本部で勤務。OECD東北スクールの立ち上げや、移民の教育政策レビュー、ノンフォーマル教育評価政策幼児教育保育政策分析、エラーニング事例研究などに関わる。現在、OECD未来の教育スキル2030プロジェクトマネージャー。

「大人にあって子供にないもの」「子どもにあって大人にないもの」

それぞれ何があると思いますか?この問いを、他の国の大人と子どもと一緒に対話すると面白いです。最初、大人には、「経験」「知識」「お金」など「目に見えるモノ」の答えが目立ち、子どもは「まだ未完成の存在」として捉えられることが多く、子どもにあって大人にないものの答えがなかなか出てきません。しかし、しばらくすると、「我を忘れて夢中になれる好奇心」や「根拠のない自信」「失敗しても許される若者の特権」「大人のルールを知らないからこそできる発想」などの答えが出てきます。

これは、今、私が担当している「OECD未来の教育とスキルを考えるプロジェクト2030」での1シーンです。日本を含む多くの国から10代の若者も大人に混じって対話をしています。この対話を聞いていた時、思春期の思い出が蘇りました。中高生の私は好奇心いっぱい、色々な事に興味がありました。やりたい事があると、その都度、言葉に出していたように思います。そして、「無鉄砲」と言われていた気がします。

高校生の時、エチオピアの大旱魃のニュースで、私より小さい子や同年代であろう子の姿がテレビで映し出され、生まれた国や地域によって、生活の環境がこんなにも異なる社会の不条理を目の当たりにし、胸が締め付けられました。以来、発展途上国の課題や文化に関心を持ち、「マサイ族について、知りたい。一緒に暮らして、家を作りたい!」と言い出した私に、家族と友達は応援してくれましたが、

「そんなのできっこない」や「危ない」と多くの大人の方に言われました。ですが、「できる!」「やりたい!」と願う想いを口に出したり、地道に行動をとることによって、味方になってくれる大人の方が増えていきました。大学生の時に、ドキュメンタリーの企画書として出してみたところ、理解ある大人の方の目に留まり、実現することができました。

思春期の皆さんは、大人にはない「想い」を持っています。多感で繊細な時期だからこそ見えるものがあります。未来を語る時、大人は、過去の経験則から、現状を分析したり、未来を予測したりすることが得意です。思春期の皆さんは、過去の経験値が少ない分、無限大の可能性を信じて、過去にはない発想をすることができます。過去や今日の常識にとらわれず、自分の中にある「ドキドキワクワク」のスイッチを押して、冒険してください。そして、皆さんがやってみたいと思うことは、周りの大人の顔をみずに、素直に「言葉」に出してみてください。そうすると、安心して話せて、大人の「カタ」にはめようとせず、失敗しても見守ってくれるロールモデルに出会える可能性が広がります。私自身もそうでした。高校生の時に感じた「心の中の熱いもの」は、今なお熱を持って、世界の教育の未来を考える上で、私を支えてくれています。

過去の応援メッセージは
ホームページ上でご覧いただけます

東京ティーンコホート 検索

原因は自分?その他? 思考の傾向と精神的健康の関係:日英比較

山崎 修道

東京都医学総合研究所 副参事研究員



科学的根拠を蓄積するため、世界ではさまざまなコホート調査が行われています。東京ティーンコホートも世界のコホート調査の経験を活かして研究を進めています。先の16号で紹介した1946 British Birth cohortや、REACH studyは、東京ティーンコホートの共同研究パートナーです。今回新たに紹介するパートナーは、イギリスのALSPAC(アルスパック)コホートです。正式名称をAvon Longitudinal Study of Parents and Childrenといい、ブリストルというイギリスの南西部にある都市にて、子とその両親が出生前から現在20歳代前半まで継続的に調査に参加しています。

今回、このALSPACとTTCが協力して、心身の不調に関わっていると考えられる「考え方のクセ」に注目して研究を行いました。人によって、身の回りで起こった出来事の原因を、「自分自身のせい」と考えたり、他人や周りの状況などの「自分以外のせい」と考えたりします。例えば、健康のために運動をしなればいけないのにできていないとき、「自分自身のせい」と考えると「自分のやる気が足りないからだ」「もっと頑張ろう」と思うでしょう。「自分以外のせい」と考えると、「天気が悪いのがいけない」「近くに公園やジムがないからできないんだ」「自分にはどうしようもない」と思うかもしれません。これまでの研究から、「自分以外のせい」と考えるクセが強いと、精神的な不調になりやすいことが分かっていますが、考え方のクセは文化や生活環境の影響を受けると考えられるので、この傾向が国によって違う可能性も考えられます。今回の研究では、この傾向が日本でも英国でも同じなのかどうか、それとも国によって違いがあるのかどうかを確かめました。

日英両国のデータを分析したところ、どちらの国でも、思春期の早い段階で「自分以外のせい」と考えるクセが強いと、数年後に精神的な不調になりやすいことが分かりました。今回の結果から、文化や生活環境の違いにかかわらず、思春期での「考え方のクセ」が、精神的な不調と関係することが分かりました。「考え方のクセ」は常に変わらないわけではなく、同じ人であっても、時と場合によって「自分自身のせい」と考えたり、「自分以外のせい」と考えたりすることもあります。また、もし「自分以外のせい」と考えがちであったとしても、そこで「自分には何もできない」と諦めてしまうのではなく、周りの人の力を借りたり、身の回りの環境を変えていくことで、精神的に健康な状態を維持できるかもしれません。いずれにせよ、自分の今の「考え方のクセ」はどちらに近いかな?と考えてみると、自分に合ったより良い方法が選べるかもしれませんね。



Sullivan, S., et al. (2021) The association between locus of control and psychopathology: a cross-cohort comparison between a UK (Avon Longitudinal Study of Parents and Children-ALSPAC) and a Japanese (Tokyo Teen Cohort-TTC) cohort, *Frontiers in Psychology*. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.600941>

論文ページはこちら



オンラインゲームの課金とのめりこみの関係は…?親子データの解析

中西 三春

東北大学医学部・医学系研究科 精神看護学分野



ギャンブルというと、競馬やパチンコなど、大人のものというイメージがありますが、最近ではスマホなどのオンラインゲームで未成年の若者も課金をすることがあります。思春期は、先のことをあまり考えずに行動しやすい年代でもあり、また、あえて危険なことをすることに魅力を感じやすい年代でもあります。そういった時期に日常的にオンラインゲームへ課金をしていると、ギャンブルにのめりこみやすくなるのではないかと推測されていますが、このことを確かめた研究はまだ世界にありません。これまでの研究で「親がギャンブルをしていると、子どもギャンブルをしやすい」という親子間の影響関係がわかっています。ギャンブルが親子の間で影響するように、オンラインゲームへの課金についても、親の利用状況が子に影響するのでしょうか。今回の研究では、東京ティーンコホートの参加者の皆さんが14歳頃に回答してくださったデータを分析しました。

2619名の思春期の皆さんのうち、オンラインゲームをプレイすることがある人(オンラインゲーマー)は、1615名(61.7%)いました。オンラインゲーマーは男子のほうが女子よりも多くいました(男子:63.2%、女子:36.8%)。オンラインゲーマーのうち、ゲームに課金する人(課金者)は、57名(3.5%)いました。お子さんがオンラインゲーマーである養育者の方のうち、ご自身もオンラインゲームをプレイすることがある人は、514名(31.8%)いました。さらに、課金する人は、31名(6.0%)いました。

データを分析したところ、養育者の課金と思春期の若者の課金の間には、関係はありませんでした。一般的なギャンブルと違って、オンラインゲームへの課金は親子で似通ってはいないようです。

次に、オンラインゲーマーのうち、国際的な基準にもとづいてゲーム利用が多すぎるとされる人の割合を調べたところ、16.2%いました。課金者に絞ると、その割合はさらに多く、40.4%でした。分析をすると、思春期の若者では、オンラインゲームへの課金とゲーム利用過多は有意に関係していることがわかりました。

今回の研究から、他のギャンブルとは違って、オンラインゲームへの課金については、親がオンラインゲームをプレイしているかどうかにかかわらず、思春期の若者がオンラインゲームに課金し、オンラインゲームにのめりこんでしまう可能性があることが明らかになりました。今後さらに研究を続け、思春期にオンラインゲームへの課金が、成人後のギャンブルなどに関係するかどうかについても、調べていく必要があると考えています。



Ide, S., et al. (2021) Adolescent problem gaming and loot box purchasing in video games: Cross-sectional observational study using population-based cohort data, *JMIR Serious Games* 2021;9(1):e23886, <https://doi.org/10.2196/23886>

論文ページはこちら

